木地師のふるさと

vol.7

R3．１発行

「東近江市の森の恵み」企画展 を開催しました

木地師文化をはじめとする本市の豊かな森林資源やその中で育まれた歴史文化の素晴らしさを普及啓発するために、令和２年９月から令和３年１月まで東近江市内の公共施設（東近江市役所、奥永源寺渓流の里、永源寺図書館、能登川博物館）で、「東近江市の森の恵み」をテーマに作品やパネルの展示を行いました。

かつては、暮らしや生業の様々な場面で木材をはじめとする森林資源が資材や燃料などに利用されてきました。しかし、生活様式の変化、林業の担い手不足、人口減少などにより、この豊かな森林資源が十分に活用されず、森の環境悪化やそこで育まれた歴史・文化の継承が課題となっています。そのため、本市では豊かな森林資源の活用やその中で育まれてきた歴史・文化の素晴らしさを次の世代に継承するための取組を行っています。今回は、木地師の歴史文化のほか関係する団体の取組や小椋谷の木地師が制作された木地製品を展示し、多くの方々にご覧いただきました。

新型コロナウイルス感染症の拡大は、利便性や効率性を求め続けてきた戦後の風潮に対して、真の豊かさや幸せの価値について考える機会を私たちに与えたのではないでしょうか。東近江市には、そんな時代の要請に答える宝がいっぱいです。森里川湖の多様性と千年を超える悠久の歴史が育んだ地域資源に磨きをかけ、「木地師のふるさと」を発信し続けていきたいと思います。

展示の様子

奥永源寺渓流の里

東近江市役所本館

永源寺図書館

能登川博物館

各地の木地師調査　～ 木地師の足跡を訪ねて ～

調査者：櫻井龍彦氏（木地師のふるさと発信事業委員会 委員／名古屋大学名誉教授）

富山県、新潟県、長野県での調査

令和２年 10 月に富山、新潟、長野各県の木地師を調査しました。富山県の砺波市庄川は飛騨から五箇山一帯の流域から流送した木材の集積地として知られています。この豊富な原木を利用して木工挽物が盛んになりました。19 世紀後半の慶応年間、魚津にいた木地師の越後屋清次が移り住んで技術を伝えたと言われています。清次のふるさとはたどっていくと近江になりますが、現在、庄川の木地師には祖先の出自が蛭谷・君ヶ畑であるといえる人はいません。木工の産地としては厳しい状況にありますが、木工協同組合もあり、庄川水記念公園内に特産館も設けて、毎年５月の連休には「木工まつり」を開催して発信事業にも努めています。

新潟県では糸魚川市大所にある木地屋民俗資料館を訪れ、木地屋会事務局の小椋裕樹（おぐらひろき）さんから話を伺いました。

小椋さんの祖父の代までは木地業をしていましたが、昭和 10 年代で衰退しました。しかし大所の木地屋出身者が「木地屋会」を結成し、集落に残る資料の収集・整理に努め、資料館には道具、ご綸旨、漆器製品など 1500 点近いコレクション（国指定文化財）があり、すばらしいものです。

長野県では、小谷村郷土館で手挽きロクロを調べ、かつて木地師集落のあった大鹿村北川集落跡や廃村となった飯田市大平宿などを見て回りました。

庄川ではロクロの回転軸と平行に
あぐらをかいて作業をします

糸魚川市大所の木地屋民俗資料館

愛媛県、香川県での調査

11 月に四国４県を訪問しました。愛媛県久万高原町で手挽きロクロを発見できたのは意義が深いと思います。これまで四国では足踏みロクロの存在は確認されていて、いくつかの歴史民俗資料館などで保管されています。しかし、手挽きロクロはありませんでした。ある農家の土蔵に埋もれていた手挽きロクロは、曽祖父が使っていた明治期のものだそうで、製品も数点残っていました。

香川県では、木地師の古屋喜義（ふるやきよし）さん、寒川廣嗣（さんがわひろし）さんにお会いしました。丸盆などの中央に「柄筋(がらすじ)」という模様をつける「象谷塗(ぞうこくぬり)」が讃岐独特のものです。古屋さんのすばらしい技術に魅了されました。

香川漆器の伝統はお盆
古屋さんは彫刻も施す

木地師の歴史を追い求めて　～ 熊野地域 ・ 黒江漆器 ～

調査者：筒井正氏（東近江市参与／愛知学泉大学准教授）

熊野地域の木地師の歴史

三重県熊野市飛鳥町の大義院を訪問し、熊野地方の木地師に関わる話を伺いました。北孝三（きたこうぞう）住職によれば、熊野地域には木地師集落が 38 カ所確認されており、大義院に保存されている過去帳には、木地師の戒名が数多く載せられています。「院殿」などの戒名をつけたものもあるとのことでした。

その後、熊野市文化交流センターで、熊野市の木地師研究会の方々と交流会をもちました。2019 年 10 月に同センターで「森の漂白の民　木地師　その伝承としごと」と題して企画展を開催し、大きな反響があったとのことです。

合同研修会の様子（2020. 11. 22）

交流会で、「蛭谷氏子駈帳」の巡廻記録をもとに、その経路、日程、木地師寄進額、各地域の木地師の軒数、移動先などについて話題を提供いただき、木地師の活動の実態、統轄していた筒井公文所の機能などを明らかにする重要な手がかりとなりました。

黒江漆器の歴史と現状

和歌山県海南市黒江は、会津、山中・輪島と並んで、三大漆器産地の一つとして知られています。室町時代に近江系の木地師集団が黒江に移り住み、紀州檜を木地として下地に柿渋を使用した渋地椀を生産し、丈夫で安価な日用品として親しまれてきました。近世以来、 紀州藩は漆器を特産品とし、領域内の木地師や塗師職人を黒江地域に集住させて保護し、漆器の一大産地として発展しました。

しかし、生活様式の変化などによって、需要が落ち込むなかで、昭和 30 年代に樹脂素材が開発され、伝統的な蒔絵や塗りの技法を活かした紀州漆器というブランド名で新たな商品開発が行われました。

現在、黒江で生産する漆器の 90%は樹脂製で、主に日用品や贈答品として生産されており、地場産業として定着しています。

黒江漆器の中心地であった「川端通り」は観光資源として活用されており、毎年秋に「紀州漆器まつり」が開催されています。平成 17 年には、紀州漆器協同組合が伝統の継承や漆器業の振興を目的に「うるわし館」を開館し、展示・即売、体験教室など幅広い活動を展開しています。

しかし、小ロットの生産で、商品開発のための先行投資が難しく、後継者問題など課題は多いとのことでした。

海南市黒江　うるわし館

川端通り　木地屋

岩手県二戸市浄法寺町への調査（後編）

前号（vol.6）では、令和元年９月に調査した岩手県二戸市浄法寺町の浄法寺漆と木地師について報告しました。今号では、浄法寺塗りと近江商人との関わりや浄法寺漆専門の工房として漆のよさを伝える滴生舎（てきせいしゃ）の取り組みを紹介します。

浄法寺の漆器と近江商人

16 世紀末、近江国日野の蒲生氏郷が会津への入部に際して、木地師や塗師を同行させ、その一部が二戸地方に移住して漆器の生産が盛になりました。この地方の木地師は氏子狩帳に記載されていませんが、近江国君ヶ畑系の木地師であることが、八幡平市赤坂田の関家に伝わる「木地師元祖略御縁起」からうかがい知ることができます。

江戸時代に盛岡藩は、漆を特産物として漆掻奉行の統制下におき、浄法寺漆器の持ち出しを禁止し、盛岡藩から許可された特定の商人が販売を独占していました。この特権を得たのが近江商人です。城下町盛岡では村井新兵衛（村市）をはじめ、井筒屋・近江屋・鍵屋など多くの近江国出身の商人が店を構え、御用商人として藩の財政にも関わっていました。

16 世紀末、近江国愛知郡柳川村（現近江八幡市）の建部七郎右衛門が蝦夷地松前を訪れ、「材木屋」を開き、これを契機に柳川村から多くの商人が松前に出店をし、昆布やニシンなど海産物を上方に持ち帰り、富を築きました。近江商人や輪島商人らの交易によって、浄法寺の漆器は販路が拡大し、蝦夷地のアイヌ民族にも流通しました。アイヌ民族は、漆器を宝器や祭具として重要視したことはよく知られており、漆器はアイヌ交易の重要な物品となりました。

平成７年に二戸市が開設した「滴生舎」では、浄法寺塗の工房、漆器・漆芸品の展示、販売を行っています。施設はショールームと漆器工房からなっており、漆塗り作業の様子をガラス越しに見ることができます。調査当時７人が漆塗りなどに従事されており、職人養成の場も兼ねています。

「滴生舎」のモットーは、伝統を継承しつつも、消費者のニーズに合った新たな漆器製作というプレミアム・オーダースタイルの追求です。「世界に発信する浄法寺うるし」の挑戦として、世界を代表する都市で展開するレストランでも広く利用されています。

滴生舎の舎内（窓の向こう側は工房）

木地師のふるさと　東近江市

発行：東近江市企画部企画課
〒527-8527　滋賀県東近江市八日市緑町 10 番 5 号
TEL（代表）0748-24-1234　（直通）0748-24-5610
FAX　0748-24-1457
Email　kikaku@city.higashiomi.lg.jp
Facebook　https://www.facebook.com/higashioumi.kijishi
（Facebook では随時、お知らせ等を行っています！！）